出社してまずは、昨日対応した依頼の伝票に間違いがないか確認。それから今日の午後に対応する依頼の詳細に目を通す。シルヴィが依頼主と約束したのは夕方だ。現場までの移動にかかるのは一時間程度、準備をする時間も考慮すると……頭の中でスケジュールを立てながら伝票ファイルのアイコンにタッチする。左にスワイプし、ちょうど出社してきた上司のスクリーンに飛ばす。

「おはようございます、リュカさん。今伝票送りました」

しかし上司はスクリーンを一瞥しただけで、何も言わずにこちらを見た。

「……何か？」

「三十点」

「はい？」

「今日のアンタ、三十点。落第ね」

「えっ」

「とりあえずひとつにくくっただけの髪、気合いが感じられないメイク、極めつけは襟と袖口が汚れた作業着」

手元を見る。リュカの言う通り、確かに袖口が黒ずんでいる。目の届く範囲に鏡がないから髪やメイクを確認する術はないが、言われた通りの状態である自覚はある。

何も言い返せずにいると、リュカは小さく溜め息をついた。

「アンタまさかその格好で家から来たんじゃないでしょうね？」

「そう、ですけど」

「信じられない！　いい年した女性がそんな汚い作業着で通勤なんて！」

「いいじゃないですか。家からここまで車通勤なんですから、誰かに見られる訳でもないですし」

「その誰にも見られてないところでこそ気を引き締めるものでしょ！」

言いながらリュカは色の濃いサングラスをずらす。パール感のあるアイシャドウで彩られた目元には艶があり色っぽく、尖らせた唇は皺ひとつなくふっくらとしている。身

体に合わせて作られたスーツが細身の体型と長い足を強調する。シルヴィとは比較にならないほど女性らしい。
「まったく、もう少し見た目に気を遣いなさいよぉ」
このテノールの声と、綺麗に剃り上げられた頭髪を除いては。
「あたしなんかいつでも勝負下着なんだから」
「リュカさんの下着の話なんか聞いてませんからね」
「いつどこで素敵なメンズと出会っても困らないように！」
「リュカさんも男じゃないですか」
毎朝恒例ファッションチェックを適当にやり過ごしてスクリーンに視線を戻す。昨日退勤してから出社するまでの間に受信したメールを整理していると、画面右下にアイコンが現れた。社内通知だ。しかも赤――緊急の。
〉リュカ、シルヴィ両名、直ちに社長席前へ
差出人はリュカの更に上の上司だった。直ちに、とは何事か。思わずリュカを見上げる。リュカもこちらを見ている。
「何これ」
「さあ。朝から大声で下着の話なんかするからじゃないですかね」
「いいえ絶対違うわ……あ、まさかシルヴィ、昨日の対応の時に余計なもの壊したとか、そういうことやらかしたんじゃないでしょうね？」
「変なこと言うのやめてください。過去一回もそんなのやらかしたことないじゃないですか」
「じゃあ何なのよ」
「分かりません。とりあえず行きましょうか」
立ち上がれば狭いオフィス内全てが見渡せる。シルヴィたちを呼び出した張本人――社長は、窓際のデスクで眉間に皺を寄せていた。
宇宙空間には様々なごみが溢れている。惑星の欠片、大破した宇宙船、使われなくなった宇宙エレベーター等々。デブリと呼ばれるそれら宇宙ごみは自然に消えることなく、いつまでも空間を漂い続ける。それは時に、宇宙船の航路

を流れ、航行を阻害する。処分するには大気圏に落とし、燃焼させるしかない。
やることは単純。デブリを細かく破砕して地球の重力圏まで移動させるだけ。あとは重力が勝手にデブリを引き寄せ、大気圏まで運んでくれる。しかしこの時デブリが大き過ぎると地表到達までに燃え切らずに落ちてしまい、地表で被害が出てしまう。かといって細かくし過ぎると大気圏まで運ぶのが大変になるし無駄に労力がかかる。ごみの材質や大きさからどの程度の破砕作業を行うかが、効率よく仕事を遂行する上で重要となる。
それを事業として行っているのが、シルヴィたちの勤める空間清掃社コメテスだ。社長のアドルフを中心とした小さな会社だが、年々増加するデブリとそれによって拡大しつつある被害の為需要が増大し、少しずつ業績を伸ばしていた。
シルヴィたちがデスクの前に立つと、社長は小さく息を吐き出して顔を上げた。
「社長、おはようございます」
「出社そうそう申し訳ないね」
「ほんとよぉ、緊急って何事？」
相手が社長だろうが誰だろうが、リュカの態度は変わらない。社長もそれを分かっていて何も言わない。会社立ち上げの頃からの仲だから、なんていう噂もあるが、詳しいことはシルヴィは知らない。
表情を変えることなく、アドルフは二人にも見えるようスクリーンを傾けた。表示されていたのは作業依頼書だった。
「急で悪いんだが、明日客先まで行ってきてほしいんだ」
「明日……ですか」
「二人とも明日対応の案件はないだろう？」
「そうだけど、随分と急ね。依頼元は？」
「ビグ・ブラス社だ」
「え、ビグ・ブラス？」
ビグ・ブラスといえば、長い歴史をもつ大手ロボットア

ーム製造メーカーだ。人々が宇宙に移住を始める前から続いている会社であり、地球上、西ユーラシアに本社を構えている。少しずつ社の機能を宇宙に移し始めているらしいが、地球上に所有する敷地は広大で、今も社のメイン機能は地球にあるはずだ。

「地球の会社から依頼とは珍しいですね」

「そうよねぇ。で、何を落とすの？」

アドルフは手元のメモに目を落とし、再びシルヴィたちを見、作業依頼書の用件欄を指差して口を開く。

「ビグ・ブラス社の、廃止になった研究コロニーの破砕だ」

→→→つづきは

《おねショタ》アンソロジー『∞-infinity-』で！